

おもしろい 大鳥居はどのように造られたか

宮の前には「伊那一」といわれる石の大鳥居があります。建てられてから120年ほど経った現在でもびくともしません。こんな大きな鳥居を建てるには大変な苦勞があったと思われます。残された記録からその一部分を探ることにします。

伊那一の立札

「総高 五米五五 笠石 九米〇五 柱石高 四米七五 円周 二米五五」というのは鳥居の大きさを示したものです。飯田下伊那では一番大きくて立派なもので、1960年（昭和35年）に伊那郷土史学会から「伊那一」の立て札が贈られました。

この立て札は、記念品の一つとして、麻績史料館に保管されています。



「伊那一」の標札

石はどこから運ばれたか

1887年（明治20年）に建立の計画が立てられ、大きな柱石と笠石の材は上黒田の野底山から5円で買い請けて、この年4月末から5月の中頃にかけて村中総出で運び出されています。野底山からの石材運びは、4月24・25日、26～28日にかけて2回行われています。村内では、16才から60才までの男性総出で、4日間で延べ800人以上、近隣の村々からのお見舞い人足も含めると総計1400人以上と記録されています。ほかの石引きの記録はありませんが、高森町上田市や、台石は大門原から火消組や若連中によって運ばれたということが当時の日記に書かれています。



現在の大鳥居

どのように建てられたか

石屋は桜町の今井長作で、代金150円で請け負っています。建て方の棟梁は北原米太郎で、火消組や若連中が協力しています。石の加工作業は1887年（明治20年）5月頃から始まり、建て方は1888年（明治21年）2月頃から始まり4月頃に建立が終わっています。



建設中の足場と村人

建立当時の写真によると、鳥居の倍近い長さの丸太が10数本建てられています。長くて重い笠石は二つに分けて造られ、組み合わされています。丸柱と横材を組む時は滑車の利用によってじりじり揚げられたものと思いますが、くわしいことは分かりません。完成間近い高い足場に登っている大勢の村人の喜びの声が聞こえてきそうに思われます。

建立を祝う鳥居祭りは、5月5日に盛大に行われています。神主5人・村人代表・若者の武者姿の行列が続き、6日は見舞い人足の近隣の長老・若者・惣代を招き、村内600余人に祝酒が振る舞われています。振る舞われたお酒は10石（約1800リットル）ほどといわれます。

費用はどのように集められたか

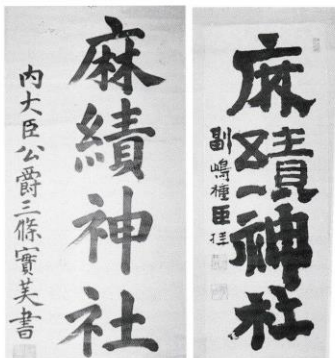
建立の費用で分かるものは、石工代150円・「麻績神社 額面」110円・石の礼金10円くらいです。石引きの経費・建て方の費用・祭典費・写真代・酒代等を合わせると900円～1000円くらいはかかっていたと思われます。

集めた費用は、村内全戸数303軒からの寄付金684円余、村出身で他村へ婿嫁入りの人から87円余、他村の有志から48円余と記録されています。その他に物品の寄付も多かったようです。松本の開産社という会社から300円借入の記録も残されています。細かい収支の様子は分かりませんが、不足だったという記録もないので、この大事業は順調に進められたものと思われます。

「麻績神社」の額面

正面に懸けられた「麻績神社」の額は、明治政府の内大臣三條実美の書です。飯島の海野幸春という人の口利きで願ひ出て書いて貰っています。銅製の額は、名古屋の笹茶という店に頼んでいます。注文には北原喜三郎が行き、出来上がりが見届けに北原米太郎が行っています。額は中津川まで運送で届けられ、若連中が中津川まで運びに行ったと記録されています。

これとは別に副島種臣の書も届けられ、三條の書と共に欠野の北原宅に保管されています。



三條実美・副島種臣の書

現在の鳥居の姿

大鳥居と横に建てられた麻績神社の碑・石灯笼は交わっていませんが、鳥居の台石は鳥居周辺の改修工事によって地中に埋まり、今は見ることができません。30年ほど前までは前側に3段の石段がありました。その東側には、旧役場へ入る石段があり、その両側には石垣がありました。座光寺支所が移転するときに、崩されて車の入る道路が造られています。



旧役場石段の上の門柱

（今村善興）